PB-202

当院における初期臨床研修：東日本大震災後の状況と取り組み

福島赤十字病院　臨床研修プログラム委員会
○鈴木（すずき）　恭一（きょういち）、宮田　昌之、管野　隆三、安達　守、
渡部　研一、中村　耕一郎、高木　朝子、八巻　俊雄、
菅野　和典、今野　英麻呂、野田　誠、大原　有香梨、
鴫原　茉奈美

2011 年の東日本大震災（福島第一原発事故）以降、福島県の医師数は減少の一途を辿っている。当院の初期臨床研修医マッチング数も、震災前は平均 3.0 名 / 年であったが 2011 年にはゼロになった。震災以降、魅力ある研修病院を目指した当院の取り組みを報告する。
【取り組み事項】1. 到達目標の明確化：プライマリケアにおける初期対応能力を身につけること、特に救急症例に対して適切な対応がとれる医師になることを目標として明示した。そのために必要なレクチャーを系統的に施行し、救急外来・当直では基礎的手技や知識の実践を心がけた。2. 院内多職種の支援：採血実習、ACLS、グラム染色検査などを通し、多職種のスタッフが研修に関わった。3. モチベーションの維持：学会発表を支援し、カンファランスでは研修医に発言を求め、それに対するフィードバックを心がけた。OSCE を開催して技能の習得を実感させた。4. 精神的サポート：スタッフとの一体感形成のため、院内での声かけや院外での交流会を開催した。研修医室の充実にもつとめた。研修医会を毎月開催して問題点を掘り起こし改善した。5. 病院見学：生き生きとした研修医を見て、医学生も何か感じてくれるはず・・・と期待した。
【結果】病院スタッフの多くが、研修医の教育に協力してくれた。病院見学に訪れる医学生は年間 44 名に増加した。マッチング数は、2012 年に 5 名、2013 年には 8 名（フルマッチング）となり、研修医が後輩を指導する体制も出来つつある。
【結語】既に多くの施設で行われている内容ではあるが、当院の取り組みを報告する。今後、研修病院としての客観的な検証と評価を受け、より魅力的な研修病院を目指したい。

PB-203

当院における臨床研修の取り組み

静岡赤十字病院　臨床研修管理委員会
○中田（なかだ）　託郎（たくろう）、小張　昌宏

当院は基幹型及び協力型臨床研修病院であり、1 学年 10 数名の研修医を受け入れている。基幹型プログラムでは、1 年次に内科、外科、救急科、整形外科、2 年次に麻酔科、産婦人科、小児科、地域医療を必修診療科としている。プログラムの管理・運営は臨床研修管理委員会が行っているが、委員は多忙な必修診療科の部長が主体であり、研修に関する各科間の調整や連携、研修医からの細かな要望に応えるという点においては必ずしも機能的ではなかった。そこで、2013 年度より必修診療科の若手・中堅医師を中心に作業部会（通称「臨床研修をよくする会」）を委員会の下部組織として設立した。作業部会では、プログラムの理念・目標・内容の見直し、学会発表のシステム作り、選択科目プレゼンテーション会の企画、メンター制度の設立、院内ミニレクチャーの再検討、ポートフォリオ作成、当直マニュアル作成、ホームページなど研修医募集に関する PR の見直し、見学学生への対応の改善、医学生向け資料の改訂、卒後臨床研修評価機構の審査の準備、研修医 OB 会の立ち上げを課題にあげた。部会員だけでなく研修医も担当者を決め、協力して課題に取り組んでいる。作業部会を中心とした当院の臨床研修の現状を発表する。

PB-204

中央滅菌室で研修を行うことの意義 新人看護師研修に関わって

熊本赤十字病院　器材管理課 [1)]、看護部 [2)]
○山本（やまもと）　直彦（なおひこ）[1)]、合志　ゆり子 [1)]、赤松　房子 [2)]

【はじめに】新人看護師研修の一環として中央滅菌室での研修を行っている。新人看護師は、患者のケアに必要な物がどのような経路で患者に届くのか、部署見学、担当者からの説明、情報交換など、物流を通してチーム医療の一員としての役割を学ぶ。また指導担当者は、中央滅菌室での勤務経験に関わらずスタッフ全員で研修に関わり、指導内容の確認やシミュレーション実施、研修レポートの確認を行い、次回の指導へ活かしている。新人看護師は目的を達成し、指導担当者は自分の知識の正確性、習得度を確認する機会となっている本研修の意義を報告する。
【内容】1）４～５人のグループ別の半日の研修。新人看護師は、スタンダードプリコーションの後、使用器材の回収、器械・手洗い洗浄、乾燥を体験する。衛生材料のパック作成をしているボランティアとの交流がある。
2）研修指導担当者は、カンファレンスで研修内容の確認を行い、日常業務での経験を交えながら説明できるように準備し、研修対象者が同じレベルの知識を得られるようにベテランスタッフが傍で補足説明を行っている。また、滅菌物の取り扱い方法や滅菌保証について、特有の専門用語を分かりやすく説明し、理解して貰えるように努めている。
3）新人看護師のレポートから、ルールに基づく物品の取り扱いの必要性など、研修の目的が達成できたこと、ボランティアの方への感謝の気持ちや全ての職種が患者ケアに関わっていることを実感していることがわかった。
【まとめ】
1）新人看護師に滅菌物の取り扱いを指導することで、経験の浅いスタッフ始めベテランスタッフも初心に帰って学ぶ機会になり業務を再確認できる。
2）研修は、新人看護師と研修指導の担当者双方の知識の修得と日常業務に活かされる貴重な情報交換の場となる。

PB-205

院内移植コーディネーター委員会の取り組み

高松赤十字病院　医事課
○豊島（としま）　慶子（けいこ）

【はじめに】院内移植コーディネーター委員会は医師・看護師・薬剤師の 14 名で構成されており、臓器移植の啓発および臓器提供時の体制整備を行っている。【問題点】当院は心停止下での臓器提供施設であり、多くの献腎移植を行っている。しかし、ドナー提供の実績がなく、ドナーとなりうる状態の患者が発生した場合に作成する個票の提出もほとんどない状態であった。そこで委員会で行った取り組みについて報告する。【取り組み】職員の臓器移植に関する理解を深めてもらうよう研修会の開催や院内会報への掲載を行っている。また、患者個票の作成に役立てようと、昨年 9 月より入院案内にドナーカードの有無を確認する書面を追加した。ドナーカードに関する情報は電子カルテへ入力され、情報が共有できるようになった。さらに、12 月には初めて心停止下腎提供のシュミレーションを行った。院内臓器提供マニュアルをもとに、病室や手術室等を使用して動きを確認していった。県の移植コーディネーターにも参加していただき、患者家族への説明や移植コーディネーターへの報告の仕方についてロールプレイを行った。これをもとに、マニュアルの修正や必要になる物品を揃えた。【今後の課題】臓器提供についてオプション提示を行ったケースが少なく、現状ではオプション提示を行うかどうか救急医に任されている。医療サイドから臓器提供の話しは切り出しにくく、どのようにオプション提示を行うか検討していく必要がある。また、今秋には脳死下臓器提供施設となる予定であり、脳死下臓器提供マニュアルの整備と臓器提供のさらなる啓発活動を行っていくことが必要であると考える。